

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第134集

たこ やま
尻山 C 窯 跡

そう さく かね ぼ
惣作・鐘場遺跡I

2005

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

凧山C窯跡と惣作・鐘場遺跡の所在する瀬戸市は、2005年「愛・地球博」の会場として注目されました。やきものの代名詞「せともの」が世界規模の共通語として周知させたことと思います。さて、本書で扱う2つの遺跡は、万博会場へのアクセス道路として利用されています東海環状自動車道の事前調査として実施いたしました。

凧山C窯跡は、中世の窯跡と関連する遺構・遺物を確認し、瀬戸市域の窯業史に寄与する成果をあげることができました。

一方、惣作・鐘場遺跡は、縄文時代と中世の集落跡の一部を確認しました。現在資料整理を進めています隣接地区の調査成果と合わせますと、瀬戸市の縄文時代像を大きく進展させることと思います。

これら多岐にわたる調査成果を本書に掲載することが、地域誌研究の一翼を担い、多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護に寄与することを願ってやみません。

最後になりましたが、凧山C窯跡と惣作・鐘場遺跡の発掘調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮賜り、関係者および関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して厚く御礼申し上げる次第です。

平成17年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 古池 庸男

そ う さ く か ね ぼ
惣作・鐘場遺跡I

例言

1. 本書は愛知県瀬戸市惣作町及び鐘場町地内に所在する惣作・鐘場遺跡(遺跡番号03792)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は東海環状自動車道の建設に伴うもので、国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託され、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センターが実施した。整理作業及び報告書作成は同センターが行った。
3. 調査期間は平成14年10月～12月である。
4. 調査は藤岡幹根(現小牧市立一色小学校教諭)、成瀬智弘(現豊野高校教諭)、酒井俊彦が担当した。
5. 調査に際して以下の関係機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター・国土交通省愛知国道工事事務所
6. 遺物整理、図版作成については以下の方々の協力を得た。
調査研究補助員 八木佳素実
整理補助員 中村たかみ、牧ゆかり (敬称略)
7. 出土遺物については以下のように外部委託を行い、その結果を掲載した。
土壌分析 (株)パレオ・ラボ
C14年代測定 (株)パレオ・ラボ
8. 本書執筆および編集は酒井俊彦が行った。
9. 今回の調査で使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標(平面直角座標)第Ⅶ系に基づくものであり、海拔標高はT.P.(東京湾平均海面高度)による。
10. 調査及び本書の作製に当たり、次の諸氏に御指導・御助言を賜った。
渡辺誠 岡本直久(順不動、敬称略)

目次

第1章 調査の概要

- 第1節 調査の経緯と経過……………1
- 第2節 遺跡の立地と環境……………4

第2章 遺構

- 第1節 基本層序……………8
- 第2節 縄文時代の遺構……………10
- 第3節 中世の遺構……………12
- 第4節 その他の遺構、自然地形他……………17

第3章 遺物

- 第1節 縄文時代の遺物……………19
- 第2節 中世以降の遺物……………22

第4章 自然科学的分析

- 第1節 惣作鐘場跡SK94埋甕内埋土のリン・カルシウム分析……………24
- 第2節 放射性炭素年代測定……………26

- 第5章 まとめ……………28

挿図目次

第1図	調査区位置	3
第2図	遺跡位置	5
第3図	周辺遺跡	7
第4図	基本層序	9
第5図	縄文時代の遺構	11
第6図	SB01	13
第7図	SB02	14
第8図	中世の遺構(1)	15
第9図	中世の遺構(2)	16
第10図	倒木痕跡・中世の包含層	18
第11図	縄文土器	20
第12図	石器・石製品	21
第13図	中世以降の遺物	23
第14図	洗浄によって検出された資料の写真	25

表目次

第1表	調査工程	1
第2表	洗浄によって検出された資料	25
第3表	各資料の化学組成	25
第4表	放射性炭素年代測定及び暦年代校正の結果	27

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

本遺跡の今回の調査は、東海環状自動車道(通称MAG道路)の建設に伴い、愛知県教育委員会を通じて国土交通省愛知国道工事事務所の委託を受け、(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが平成14年度に実施したものである。東海環状自動車道に並行して建設中の県道瀬戸設楽線とのアクセス道路部分を調査対象とした。調査区の名称はⅡSSK02D、調査面積は2125㎡である。

惣作・鐘場遺跡は愛知県瀬戸市惣作町・鐘場町地内に所在し、庄内川の支流である赤津川の右岸の河岸段丘上に立地する。この地域は水田及び畑などの農耕地として利用され、宅地あるいは工業用地としての利用はあまり進んでいないため、これまで遺跡を調査する必要が生じる開発は少なかった。調査以前には、付近の遺跡としては調査区の北側丘陵上にある大目神社古墳と大目神社遺跡、及び南側の赤津川、沿いに太子縄文遺跡、太子遺跡などが存在することが認識されていた。これらの遺跡は本格的な調査は行われておらず、本遺跡の所在する地区は遺跡の空白部となっていた。

本遺跡の調査の契機となったのは県道設楽瀬戸線の建設である。建設に伴い、平成10年度に愛知県教育委員会は遺跡の南部の道路建設用地内の試掘調査を行った。その結果、古墳時代から近世にかけての遺物等が出土することが認められ、惣作川より南の区域の遺跡範囲を確認した。このため、同教育委員会から委託を受けた本センターが、平成12年度より赤津川から惣作川にかけての地域の調査を開始した。また、同年度に惣作川以北の試掘調査を行ったところ、縄文時代から古墳時代の遺物が認められ、大目神社古墳の所在する丘陵にかけての河岸段丘上にも遺跡が広がることが確認された。これにより本センターは平成13年度に北部区域にも対象地域を広げ、調査を実施した。平成14年度は今回の調査以外に、県道設楽瀬戸線関係で惣作川以北に2調査区、以南に1調査区を設定して調査を実施している。

県道設楽瀬戸線と東海環状自動車道関係で本センターが行った調査は、平成12年度南部2調査区計4400㎡、平成13年度南部3調査区・北部1調査区計5860㎡、平成14年度北部2調査区・南部2調査区計5465㎡であり、今回の調査までの調査面積は15725㎡に及ぶ。これ以後は、平成15年度南部2調査区・北部1調査区計4850㎡、平成16年度南部2調査区・北部1調査区計10200㎡である。調査面積の総計は30775㎡である。

調査工程	10月	11月	12月
事前準備	■		
表土はぎ	■	■	
遺構検出		■	■
遺構掘削		■	■
遺構測量		■	■
空中測量			■
補足調査			■
資材撤去			■

第1表 調査工程

これまでに検出された遺構・遺物は旧石器時代終末から近世末までの時期に及ぶ。出土遺物量は本センターが標準的に使用する内容量27Lコンテナでおよそ700箱である。また、(財)瀬戸市埋蔵文化財センターによる本遺跡の調査が平成14年度より行われている。主に県道建設に伴う周辺道路整備によるもので、接続する市道部分の調査を行っている。平成14年度に1300㎡を調査している。主に弥生時代から近世までの遺構・遺物を検出している。

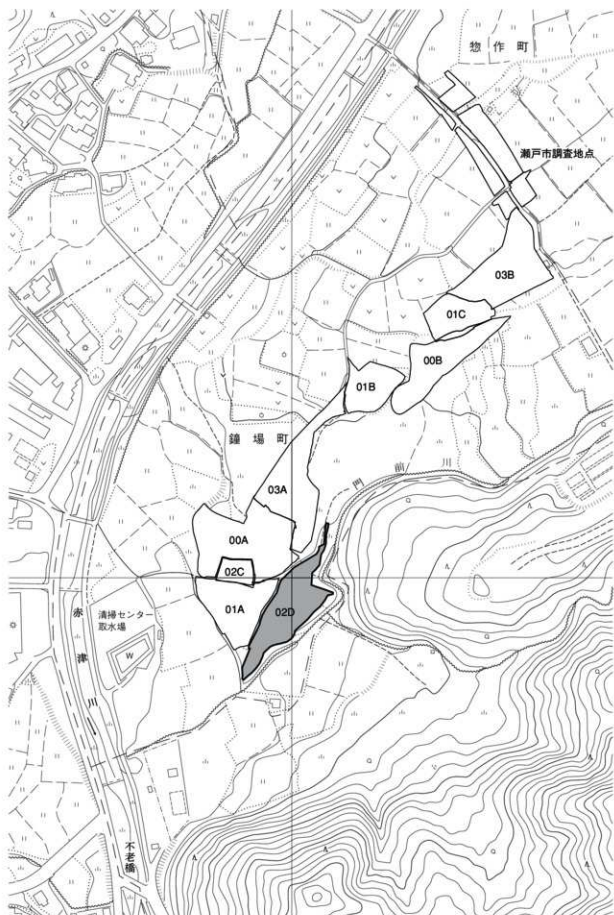
現在、環状自動車道と県道に関わる部分について本遺跡の調査は終了している。

2. 調査の経過

愛知県教育委員会の平成10年度の試掘調査では、遺跡の西から南側を流れる門前川から遺跡中央部の惣作川までの範囲に20ヶ所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、門前川及び惣作川河谷を除いた段丘上に縄文時代、古墳時代後期、中世・戦国時代及び近世の遺構・遺物が認められ、遺跡が広く展開することが確認された。この結果に基づいて、平成12年度より本センターの調査が開始された。また、同年度に惣作川以北の区域内について赤津川との間の遺跡の広がりを確認する試掘調査を本センターが行った。試掘トレンチ17ヶ所を設定して調査を行ったところ、縄文時代及び古墳時代前・後期の遺構・遺物が検出された。この結果、遺跡範囲は惣作川以北の赤津川河谷に至るまでの段丘上で、縄文時代から近世までに及ぶ遺跡と認識された。また、惣作川を挟んで2地域に渡り、両者に遺跡としての性格に差異があることが認められた。その中で本調査区は比較的遺構の密度が低い地区と認識された。本調査区の西に隣接する低位段丘面上は平成13年度に、北側の高位段丘面上は12年度にそれぞれ調査が行われた。その結果、旧石器時代末から中世の遺構・遺物が検出された。

今回の調査の準備は、同年度において先行して行った県道部分の調査作業と同時に実施された。10月下旬に先行して行った04C区の調査と同時に調査区の設定、フェンスと現地作業建物の設置を行った。重機械による現在の耕作土などの表土の掘削は、10月末週から開始し、11月初めまで行った。調査区南部の門前川の河谷部分は遺構がなく、湧水が激しいため、本来の河谷の河床部分まで掘り下げることは断念した。表土掘削期間の後半時期より、調査作業員の作業を開始した。

調査区が設定された段丘面は、中世以後の耕作地化の影響により削平が著しく、表土を除去した段階で段丘の基盤面が露出する状況であった。段丘端部に近い部分では段丘基盤面がやや傾斜するため、水平の削平に対して基盤が低くなるのに比例して薄い中世の遺物包含層が遺存している。遺構の遺存状況は全体に悪く、表土除去と中世遺物包含層の掘り下げによって基盤面まで検出面を下げた遺構を検出した。遺構掘り下げを行ったあと11月29日にヘリコプターを使用して空中測量・写真撮影を行った。12月初旬に必要な遺構実測等の作業を行った後、資材を撤去して調査を終了した。遺物の出土量は、土器と磁器類及び石器類を合わせて本センターの27Lコンテナ6箱である。調査終了後は道路工事が開始され、調査部分の遺構は消滅した。



第1図 調査区位置

第2節 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

遺跡は瀬戸市の東部、惣作町から鐘場町にかけて所在する。瀬戸市は、愛知県の中北部、名古屋市の北東に位置する。市内は尾張平野を囲む山地帯から尾張平野に移行する地域にある。市域の南東部から北部にかけては木曾山地に続く山地帯、中央部は平野に移行する丘陵地帯となり、西部は尾張平野の一部となる。市域の北西部の境界は庄内川であり、これに合流する河川が東の山地帯から発し、尾張平野にむけて流下する。北から水野川、瀬戸川、矢田川があり、流域に沿って丘陵部に盆地を形成している。遺跡は矢田川の支流である赤津川の左岸に位置する。赤津川は市の東辺となる三国山と猿投山とを含む山地塊を源流として西流し、市域の東部で南に流れを変える。海上川と合流して矢田川になり、再び西流した後、庄内川に合流する。遺跡は赤津川が南流する部分に広がる赤津盆地の中央部分に所在し、盆地は川の両側に広がる形で、北東から南西に延びる。東側は三河山地に連なる山塊で、西側は丘陵地帯を挟んで市街地である瀬戸川の盆地となる。

遺跡は北東から南西に流れる赤津川東側に面した2段からなる河岸段丘上に立地する。標高は159～174mを測る。南流する赤津川に平行して、その支流である惣作川と門前川が流れる。惣作川は遺跡が立地する段丘に連なる山地塊の東側から南流し、遺跡範囲の中央を横切るかたちで赤津川と合流する。この惣作川の河谷によって遺跡は南北の2地区に別れる。遺跡の北部は赤津川と惣作川に挟まれる北東から南西に延びる舌状の河岸段丘上に展開する。北端は赤津川の河谷となる。門前川は遺跡の東側の山塊から発し、遺跡の東側を流れて遺跡の南の境界部で赤津川に合流する。南部は赤津川と門前川の河谷に挟まれる比較的広い段丘上に立地する。

現在の遺跡及びその周辺は農耕地となっている。大部分は昭和期以降の土地改良によって整備された水田である。河谷などの傾斜面の段差が存在するが、段丘面上は全体として緩やかな傾斜地となっている。

2. 歴史的環境

瀬戸市は歴史的な環境として、窯業生産の影響が顕著な地域である。本遺跡を中心とした赤津盆地では、ことに中世から連続して継続して築かれてきた古窯址が集中する。赤津盆地周辺では東側の山地から市内中央部にいたる丘陵地帯の斜面に多数の古窯址が確認されている。

本遺跡北方の丘陵地帯には八床古窯址群が所在する。昭和36・44年に調査が行われ、20基が確認されている。すでに消滅している窯体が多いが、13世紀の山茶碗及び古瀬戸施釉陶器と15世紀の古瀬戸施釉陶器を生産している。北東の山地部には3基の15世紀の古瀬戸施釉陶器窯からなる鶯古窯址群が所在する。本センターは東海環状自動車道建設に伴ってこのうちの1基の調査を平成11年から12年度にかけて行い、窯体、灰原と製陶工房址を検出している。

赤津盆地をとりまく、丘陵及び山塊の斜面は特に古窯址が密集する。西北～西側の丘陵上には馬ヶ城、大栃、椿、保手、銭亀、銭東など古窯址が立地する。いずれも13世紀の中世山茶碗および古瀬戸施釉陶器と15世紀の古瀬戸施釉陶器を中心とする窯である。大部分が山林となっていて開発が進んでいないため調査例は少なく、現存するものが多い。盆地の南西部は現在のところ比較的古窯址が少ない地域であるが、河合古窯址群などがある。この地域で県道瀬戸設楽線建設にともない、本センターは平成15年度に万徳峠窯跡と河合D窯跡の調査

を行っている。万徳寺峠窯は13世紀の山茶碗と施釉陶器である四耳壺などの瓶子類との併焼窯であることを確認している。河合D号窯跡は窯体は調査されておらず、灰原のみが確認され、13世紀の山茶碗と14世紀の古瀬戸施釉陶器の最低2基の窯体の存在が推定されている。

赤津盆地東方の山地の谷斜面にも鳳山、呉、神田、巡間、白山などの古窯址が分布する。確認されているものでは、中世13～15世紀の山茶碗と古瀬戸施釉陶器の生産窯がほとんどである。本センターは東海環状自動車道の建設にともない、この地区の窯跡の調査を行っている。平成13年度に巡間E窯跡、平成14年度に鳳山C窯跡の調査を行い、前者は窯体が2基確認され、13世紀の山茶碗と瓶子類の施釉陶器を併焼している。後者は2基存在し、14世紀の山茶碗と施釉陶器を生産していることを確認している。また、県道瀬戸設楽線建設にともない、単独の古窯址として近世17世紀の施釉陶器生産窯2基が確認されているの瓶子窯跡を調査している。窯体の調査は行われていないが、近接する河道沿いに堆積する遺物包含層を調査し、窯生産品と工房関係の木製品・金属製品を含む各種遺物を検出している。

赤津盆地南東から南側の山地帯から丘陵地帯にかけては2～3基程度を単位として横根、平林、笹松、篠田などの古窯址群が展開する。これらは13～15世紀の山茶碗あるいは古瀬戸施



第2図 遺跡位置

軸陶器の窯跡である。開発が進んでいないため、調査されたものは少ないが、扶桑古窯址群の一部が調査された他は消滅している。

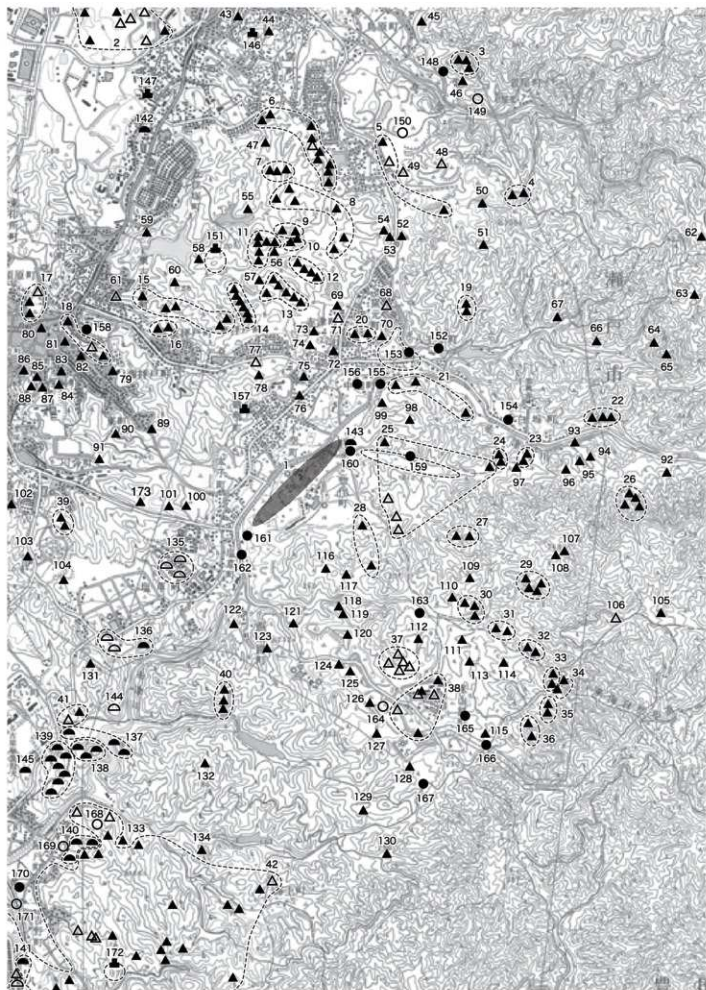
赤津盆地の中心は市街地となっていて、開発行為による消滅例が多い。中世窯以外に時期的には近世以降の連房式の窯跡が含まれる。また、隣接する瀬戸盆地には近世以降の窯跡が分布する。市街化が進み、消滅している窯も多い。近世以降、近代の窯跡が確認されている。

赤津川下流域には30基以上からなる広久手古窯址群が所在する。12～15世紀の山茶碗と施軸陶器の生産窯が主体であるが、11世紀の灰軸陶器窯も存在する。

古窯址群以外の遺跡としては、古墳時代後期の群集墳が分布する。赤津盆地の南部地域に多く、万徳寺、草草、高塚山、塚原、川原山、吉田等の古墳群がある。調査例は少ないが、塚原古墳群は昭和40年に調査されている。本遺跡が所在する段丘につらなる北の丘陵上には、単独で大目神社古墳が存在する。

この地域では古窯跡および古墳群については確認された例が多いが、それ以外の一般の遺跡は比較的少ない。近年の開発行為によって調査例も増えてきており、本遺跡もその例に含まれる。これまで調査された遺跡では、本センターが関わったものとして八王子遺跡、長谷口遺跡、鳳山屋敷遺跡、吉野遺跡がある。これらは東海環状自動車道および県道瀬戸設楽線建設に伴うものである。八王子遺跡では、縄文時代早期の堅穴住居が確認され、縄文時代早期から中期の遺物および中世の遺物が検出された。長谷口遺跡は縄文中期及び弥生時代の堅穴住居が検出された。鳳山屋敷遺跡では、中世末から近世にかけての屋敷地が確認されている。吉野遺跡では縄文時代と中世の遺構・遺物が検出され、盆地の沖積地において縄文時代中期後半から後期前葉の堅穴住居が確認された。赤津盆地とその周辺を概観してみると、岩屋堂遺跡、鳥原遺跡、針原遺跡、太子縄文遺跡、山路縄文遺跡など縄文時代の遺跡が多い。その他、太子遺跡、山路遺跡など旧石器時代の遺跡の例が少数ある。

1 惣作・藤原遺跡	31 定平1・2号窯	61 菊池窯	91 稲荷窯	121 山路6号窯	151 馬ヶ城
2 八束1～21号窯	32 平林1・2号窯	62 兼越窯	92 長骨西窯	122 清時センター窯	152 長谷口遺跡
3 堀1～3号窯	33 菅谷北1・2号窯	63 藤原窯	93 城ヶ根口窯	123 高島屋窯	153 八王子遺跡
4 新井1・2号窯	34 坂田1・2号窯	64 藤下窯	94 城ヶ根東窯	124 清水窯	154 白雲院南寺遺跡
5 針原A-C窯	35 坂田東窯・南窯	65 長谷口A窯	95 城ヶ根西窯	125 清水窯	155 鳳山屋敷遺跡
6 堀1～10号窯	36 鳥屋北北窯・西窯	66 尾窯	96 城ヶ根西窯	126 大松窯	156 赤津遺跡
7 殿塚1～3号窯	37 秋委1～5号窯	67 木下川窯	97 新治間興窯	127 山路西山窯	157 赤津遺跡
8 馬ヶ城A-F窯	38 山路A-F窯	68 百目窯	98 鳳山窯	128 大平窯	158 古瀬戸小西遺跡
9 大塚北1・2号窯	39 河合A1・2号窯	69 白山社窯	99 飯子窯	129 藤原窯	159 惣作遺跡
10 大塚南1・2号窯	40 藤田1～3号窯	70 帆立北窯	100 太子A窯	130 海上A窯	160 大目神社遺跡
11 堀1～4号窯	41 塚原1・2号窯	71 堀三高窯	101 方勝神窯	131 若宮A窯	161 太子縄文遺跡
12 飯子1～4号窯	42 広久手1～29号-C社窯	72 作助窯	102 春田窯	132 海上北山窯	162 太子遺跡
13 籠原A-C窯	43 品野野根屋敷跡	73 赤津A窯	103 春田A窯	133 古代A窯	163 山形遺跡
14 越亀1～6号窯	44 門六窯	74 ちんちん山窯	104 籠原A窯	134 海上B窯	164 海上遺跡
15 井守西A-C窯	45 浄願寺西窯	75 小左衛門窯	105 松平窯	135 方勝寺1～3号墳	165 東山路遺跡
16 金剛院裏1・2号窯	46 浄願寺東窯	76 西窯A窯	106 鳥居窯	136 籠原1～3号墳	166 山路縄文遺跡
17 夕日A-C窯	47 五位塚窯	77 井戸窯	107 藤峰北窯	137 山口環塚1～3号墳	167 大目縄文遺跡
18 王子穴窯・中宮・鳥原	48 仏供田号窯	78 松坂窯	108 藤峰東窯	138 高塚山1～3号墳	168 針原遺跡
19 神原西西窯・東窯	49 三ノ宮	79 赤井窯	109 上山路A窯	139 塚原1～2号墳	169 尾山遺跡
20 笠元A・B窯	50 五葉窯	80 寺本窯	110 藤右衛門窯	140 川原山1～3号墳	170 吉野遺跡
21 鳳山A-C窯	51 赤津北根窯	81 日田窯	111 平西窯	141 吉田1～4号墳	171 吉野遺跡
22 須1～3号窯	52 針原窯	82 針原窯	112 穴山窯	142 五位塚古墳	172 塚山遺跡
23 神田東1・2号窯	53 サカイ窯	83 平右衛門窯	113 上山路B窯	143 大目神社古墳	173 川合古窯
24 神田西1・2号窯	54 奥白根窯	84 元十窯	114 平塚	144 山口環塚北古墳	
25 沼間A-F窯	55 菅原窯	85 朝日下窯	115 山路八幡窯	145 荒山古墳	
26 白山1～4号窯	56 八坂西窯	86 朝日西窯	116 赤土窯	146 山崎遺跡	
27 城狭間上窯・下窯	57 馬ヶ城A窯	87 朝日窯	117 菅元東山山窯	147 阿保跡跡城	
28 門田A・B窯	58 馬ヶ城窯	88 藤塚山窯	118 辰尻東窯	148 鳥原遺跡	
29 藤崎南1～4号窯	59 本原西西窯	89 東野A窯	119 田尻窯	149 雲原寺遺跡	
30 横根1～3号窯	60 留林窯	90 榊A窯	120 石坂窯	150 針原遺跡	



第3図 周辺道跡

第2章 遺構

第1節 基本層序

1. 調査区と周辺の地形

遺跡は赤津川の東側の河岸段丘上に立地する。河岸段丘は大きく上位と下位の2面が存在する。二つの面は遺跡北部の赤津川上流では緩やかな傾斜で比高差は1m前後であるが、南端部分では3～4mとなり、傾斜は急角度である。上位段丘面は平坦で北西方向に緩やかに高度を上げる。調査区の所在する段丘の東西の幅は最大で130m程であり、中央の最高所を中心に南と北の河谷に向かって高度を下げる。

下位段丘は河谷との境目に上位段丘の周囲を取り囲む形で広がる。遺跡南部においては、門前川の河谷部分には下位段丘がなく、上位段丘から河谷に移行し、本来の地形はやや急な角度の傾斜地となっている。

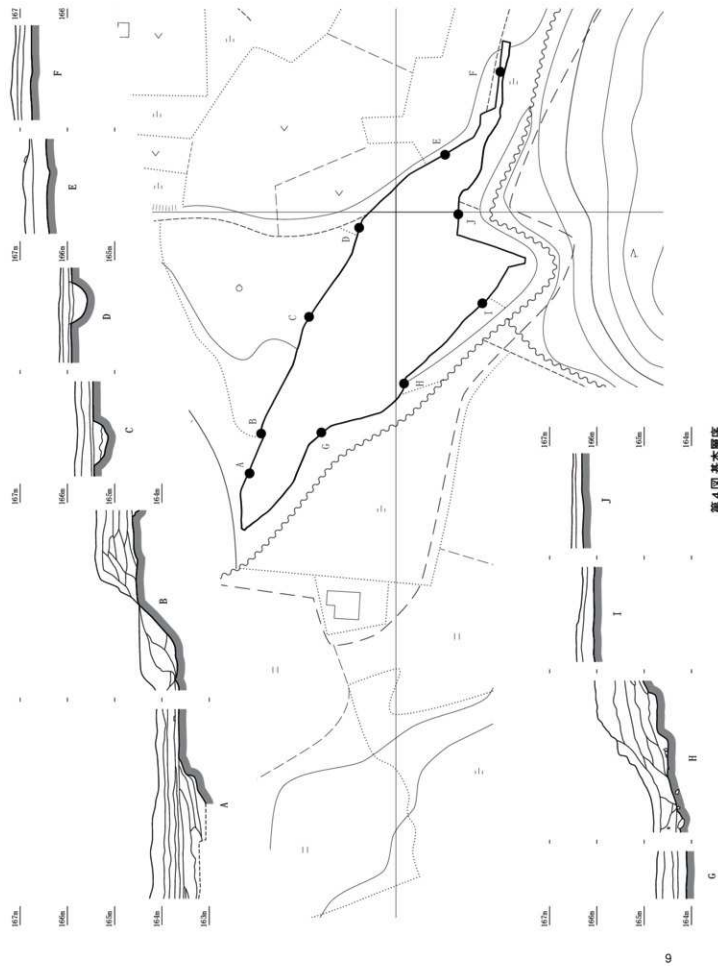
今回の調査区は、北東から延びる河岸段丘南端の下位段丘面に相当する。この段丘は東から南側は門前川の河谷に面し、西側は赤津川の河谷である。北側は上位段丘に移行し、比高差約4mの急傾斜地となっている。調査区の北東の門前川河谷に相当する隣接地は現在、調査区より比高差約15mほどの盛り土が存在する。戦前から東の山塊から採土が行われており、その排土が小丘陵状に河谷を埋め立てたため形成された。このため本来の地形の状況が不明な部分がある。また、門前川は調査区の隣接した部分を流れている。本来は河谷の中央部を流れていたものが、河谷の西側に人為的に流路を移動したものと考えられる。調査開始時に調査区は昭和期の土地整備によって区画された水田であった。

調査区は大部分低位段丘の平坦面にあるが、南端部は門前川の河谷に相当し、南に向かって高度を下げる。上位段丘との境の傾斜地が始まる、最も高い部分で標高167mを測る。門前川の河谷に到る下位段丘の南端部分で標高165mであり、調査区南端の河谷の最も低い部分で164m前後の標高である。調査区南部において下位段丘と河谷との境界部はほぼ東西方向の傾斜地で、比高差約1.2mである。河谷の基盤は南へ緩やかに傾斜していく。

2. 基本層序

下位段丘面は中世以降の耕作による基盤面の削平が全面にわたって認められる。調査区北半は近年の水田耕作土が直接基盤面に乗っている。基本的に上層から1黒褐色シルト質層(耕作土)、2褐色シルト質層(耕作土)、3黄褐色シルト質層(基盤層)である。1は0.2～0.4m、2は0.2～0.3mの厚さを測る。南部の段丘端部に近い部分では標高が下がるに従い、1・2層と3層の間に中世の遺物包含層となる暗褐色シルト質層が堆積する。段丘端部で最も厚くなり、0.4mほどになる。瀬戸市東部のこの地域は基盤は花崗岩層となる。調査区の基盤はその上位に堆積している洪積層で、河川堆積性の砂分の多いシルト質層である。部分的に礫層となる。

南部の河谷部分の表土は近年の耕作土であり、基盤面は砂礫層となる。上層から1. 黒褐色シルト質層(耕作土) 2. 緑褐色シルト質層(耕作土) 3. 褐色砂礫層(基盤層)である。土層の厚さは、1は0.2～0.4m、2は0.1～0.3mである。南端に近い部分は基盤の砂礫層が急傾斜で高度をさげ、最深部は不明である。高度の下がった部分は褐色の中粒から粗粒の砂を主体とする河川による堆積層となる。



第 4 回 基本圖序

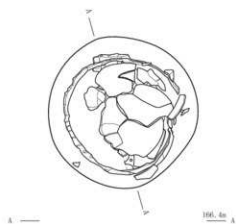
第2節 縄文時代の遺構

本センターが行った隣接する区域の調査によって、縄文時代の堅穴住居等の遺構が検出され、本調査区においても同時代の遺構の存在が予想された。段丘上は基本的に中世以降の基盤面の削平が著しく、北半部は現代の耕作土が基盤にまで達する。12世紀以前の旧表土は攪拌されており、掘り込みの浅い遺構は滅失する状況である。基盤面に達する比較的掘り込みの深い遺構のみが確認された。

SK94 (第5図左上) 調査区北部の低位段丘端部に近い位置で検出された土器埋設遺構である。基盤面上で検出された。径約40cm、深さ25cmを測る。底部を欠損した径約30cm、残存高約20cmの無文土器の胴部(第11図18)が、口縁部側を上位にして直立した状態で出土した。内部下半に底部から胴部下部にかけての無文土器の破片(第11図17)が内面を上にした状態で水平に埋置されている。底部破片は、径30cm以上の平底の個体であり、直立して埋置された無文土器胴部とは別個体である。直立胴部破片については本来は口縁部まで埋置されていた可能性があるが、出土状況からは不明である。底部破片は、埋設時にすでに割れていた破片を二重に水平に敷く形で埋置されている。埋土は砂質の褐色土であり、基盤面の土層を主体とする。焼土、炭化物、有機物などは調査時には肉眼で確認できなかった。遺構は単独に設置されたものではなく、堅穴住居の貯蔵穴あるいは、炉などの施設の下部の可能性が高いが、削平のため上部構造が消失しているため確定できない。なお、埋土は化学分析と水洗による遺物検出を行った。遺構の時期は特定は出来ないが、調査区内から出土した縄文土器、及び土器の器形から縄文時代後期と考えられる。

SK132 (第5図下) 調査区中央部の段丘端部に近い位置で検出された土器埋設遺構である。基盤面上で検出された。長径約50cm、深さ15cmの土坑に残存高12cmの土器底部から胴下半部(第11図19)が直立した状態で埋置されている。現存の部分は文様を有しない。本来的には、底部から胴下部以上が埋置されていたものと考ええる。埋土は砂質の褐色土で、基盤層を主体とする。焼土、炭化物、有機物などは調査時には肉眼で確認できなかった。遺構は単独に設置されたものではなく、堅穴住居の貯蔵穴、あるいは炉などの建造物の下部の可能性が高いが、削平のため上部構造が消失しているため確定できない。遺構の時期は特定できないが、器形及び調査区内出土の縄文土器から縄文時代中期後半から後期の時期と考えられる。

SK127 (第5図右中) 調査区北部、上位段丘に移行する急傾斜地に近い位置の基盤面上で検出された。長径1.4m、短径0.6m、深さ28cmを測る。埋土は黄褐色土である。埋土中より極少量の縄文土器を検出した。細片であり、詳細な時期は不明であるが、調査区内出土縄文土器などから中期から後期の時期と考えられる。



A ————— 100.4m



100.2m



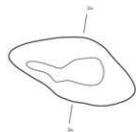
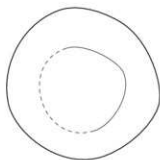
A ————— 100.4m



100.2m

SK94 (1/10)

1. 101R3/4 暗褐色中粒砂、101K2/2 炭化物(竹) 産じる
2. 101R4/6 褐色細粒砂
3. 7.51K3/4 暗褐色中粒砂
4. 101R4/4 褐色中粒砂
5. 2.514/6 オリーブ褐色細粒砂

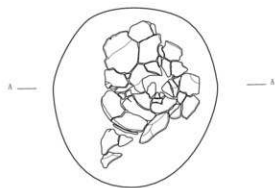


A ————— 100.5m

————— 100.5m

SK127 (1/40)

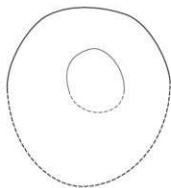
1. 101R. 4/3 に近い黄褐色細粒砂 51R4/8 非褐色混じる
2. 101R4/3 に近い黄褐色細粒砂、粘質 101R4/2 灰黄褐色土混じる
3. 2.514/4 オリーブ褐色細粒砂 風化花崗岩5cm 大を含む
101R4/6 ブロック状に混じる



A ————— 100.3m



100.1m



SK132 (1/10)

1. 7.51R4/4 褐色粗粒砂、風化花崗岩5cm 大を含む
2. 7.111R4/4 褐色細粒砂

第5図 縄文時代の遺構

第3節 中世の遺構

遺構は基盤面上で検出された。遺物包含層が基盤面に接することから、中世の時期で耕作土が基盤面まで達していたと考えられる。主な遺構としては、柱穴と考えられる小土坑が調査区の低位段丘面上全体で検出されている。出土遺物は少なく、埋土の共通性からこの時期の遺構と考える。掘立柱建物として確認されたのは2棟である。

掘立柱建物

SB01(第6図) 調査区北部低位段丘面上で検出された。東西に長軸方向をとる。柱間2×3間、長軸5.9m短軸4.4m、長軸方位N-65°-Wである。柱穴の検出面からの掘り方は浅く、深さ0.2~0.3m、直径は約0.2mである。埋土は細砂分を多く含む褐色シルト質土で花崗岩礫を含む。北側長辺の柱穴SK120より南部系山茶碗第4型式の皿が2点出土した。(第6図右上)人為的な埋設の可能性がある。その他の出土遺物は山茶碗の細片が極少量出土したのみで、図示可能なものはない。

SB02(第7図) 調査区中央部低位段丘面上で検出された。南北に長軸方向をとる。柱間2×3間、長軸6.8m短軸4.4m、長軸方位N-27°-Eである。柱穴の検出面からの掘り方は浅く、深さ約0.2m、直径約0.2mである。埋土は褐色~暗褐色のシルト質土。砂分が多く、基盤層の花崗岩の細礫を含む。柱穴からの出土遺物は山茶碗の細片が少量出土したのみである。短軸方向はSB01の長軸方向とほぼ一致することから、SB01と同時存在の可能性がある。

土坑

SK03(第8図) 調査区南部段丘端部に位置する。長軸1.2m短軸0.7m、深さ16cm。埋土は砂質の褐色シルト質土である。

SK43(第9図) 調査区中央部で検出された。直径0.6m、深さ0.1mである。埋土は褐色細粒砂を基本とする。埋土中より南部系山茶碗第4型式の碗と皿が出土した。

SK57(第8図) 調査区南部段丘端部に位置する。浅い落ち込み状で、長軸3.7m短軸1.7mである。埋土は褐色中粒砂を主体とする。

SK65(第8図) 調査区中央西部に位置する。長軸2.2m以上短軸2.0m以上である。埋土は黒褐色細粒砂を基本とする。多量の木材などの炭化物が含まれる。遺構の基底面は被熱していない。SK96に切られ、これと共通の埋土である。性格は不明である。

SK96(第8図) 調査区中央西部に位置する。長軸4.4m短軸1.6m、深さ0.2mである。平面長方形に近い形である。掘り方は急角度で、底は平である。埋土は黒褐色細粒砂を基本とし、木材などの炭化物が多量に含まれる。遺構の基底面は被熱していない。遺物は少量の山茶碗と熱で融着した陶製の珠が出土した。性格は不明である。

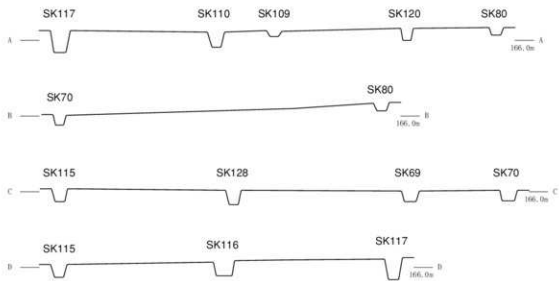
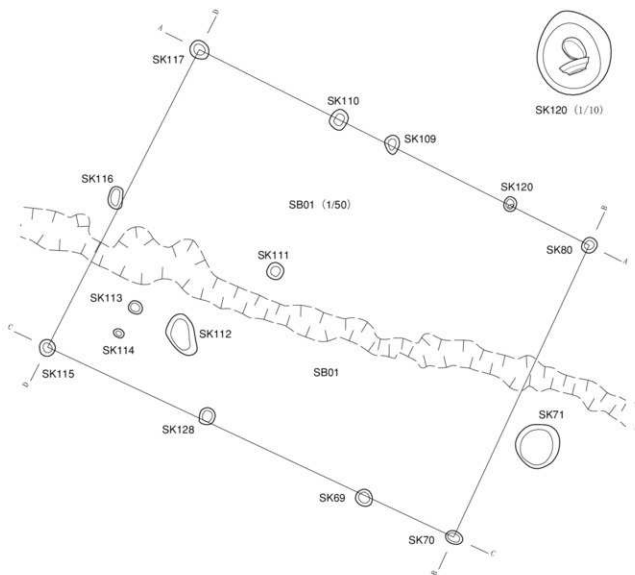
SK76(第9図) 調査区北東隅段丘端部に近くに位置する。長軸0.8m短軸0.7m、深さ0.4mである。埋土は褐色細粒砂を基本とする。少量の山茶碗、常滑窯産甕の細片が出土している。

SK81(第9図) 調査区北部中央に位置する。直径0.4m、深さ0.4mである。埋土は褐色細粒砂である。

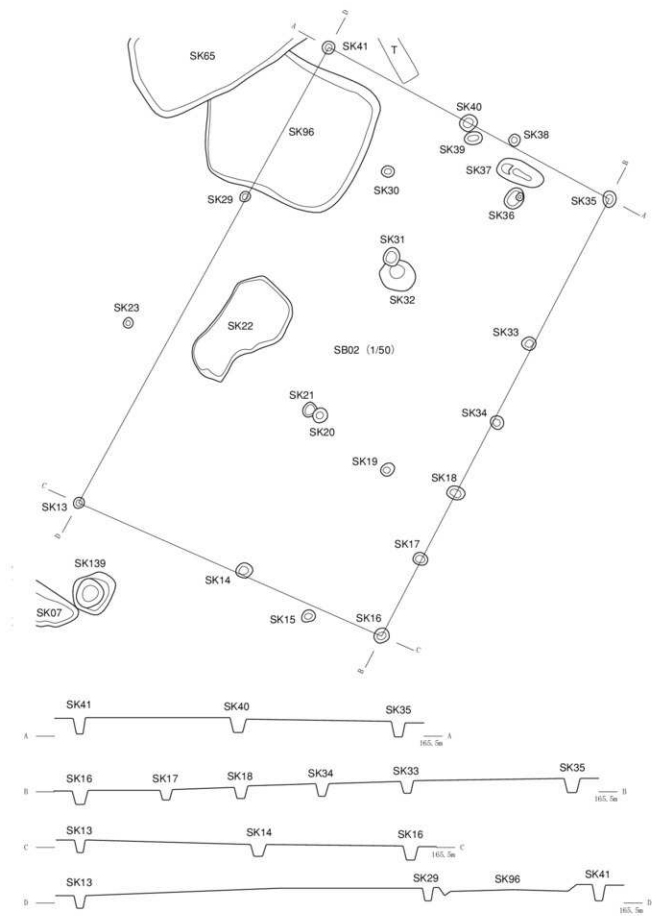
SK82(第9図) 直径1.2m、浅い掘り込み状である。土師器細片が検出された。埋土は暗褐色細粒砂である。

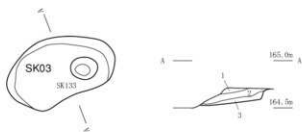
SK93(第9図) 長軸1.0m短軸0.4m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色細粒砂である。

SK104(第9図) 調査区中央西部で検出された。長軸1.6m短軸1.2m、深さ0.3mである。埋土は黄褐色細粒砂を基本とする。少量の山茶碗細片が出土した。性格不明である。



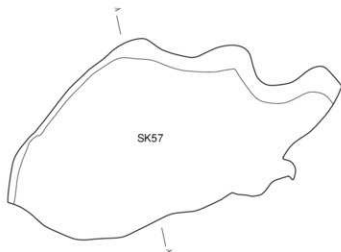
第 6 图 SB01





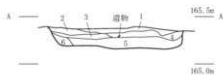
SK03 (1/40)

1. 10YR4/4 褐色粗粒砂，風化花崗岩 5mm 大を含む
2. 5Y3/2 暗オリーブ褐色粗粒砂，風化花崗岩 5mm 大を含む
3. 10YR5/6 黄褐色中粒砂



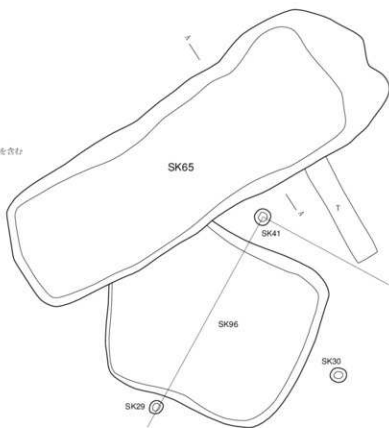
SK57 (1/40)

1. 10YR4/4 褐色中粒砂，風化花崗岩 5mm 大を含む
2. 10YR4/6 褐色粗粒砂，風化花崗岩 5mm 大を含む



SK65 (1/40)

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂，風化花崗岩 5mm 大を含む
2. 10YR4/4 褐色細粒砂
3. 10YR4/6 褐色粗粒砂
4. 10YR3/3 暗褐色細粒砂
5. 10YR2/2 黒褐色細粒砂
6. 10YR2/2 黒褐色細粒砂，10YR4/6 土塊混じる



第8図 中世の遺構(1)

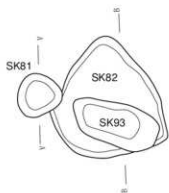


A ————— 166.5m A



SK76 (1/40)

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂
- 10YR4/6 褐色土 (粘質) ブロック状に凝じる
2. 10YR4/4 褐色細粒砂
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色土ブロック状に凝じる



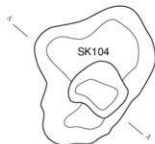
SK81 (1/40)

A ————— 166.5m A



SK82・93 (1/40)

B ————— 166.5m B



A ————— 166.0m A



————— 165.5m

SK104 (1/40)

1. 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂
- 2.5Y5/6 黄褐色土ブロック状に凝じる
2. 5Y4/6 オリーブ褐色中粒砂
- 風化花崗岩 5cm 土を含む
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色土ブロック状に凝じる
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色土ブロック状に凝じる
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂
6. 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂
- 2.5Y5/6 黄褐色土ブロック状に凝じる
7. 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂
8. 2.5Y3/3 緑オリーブ褐色細粒砂
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色土ブロック状に凝じる



A ————— 166.0m A



————— 165.5m

SK43 (1/40)

1. 10YR4/4 褐色細粒砂
- 2.5Y4/6 オリーブ褐色土ブロック状に凝じる
2. 10YR3/3 暗褐色細粒砂
- 10YR4/6 褐色土ブロック状に凝じる
3. 10YR4/6 褐色細粒砂

第9図 中世の遺構(2)

第4節 その他の遺構、自然地形他

1. 近世以降の遺構

現在の耕作地の区割りに沿って検出された溝を一括する。下位段丘面は北から南に向かって高度をさげ、これらの溝は斜面方向に直交する形で東西方向に走る。遺物としてはいずれも山茶碗の細片が少量出土するが、埋土は旧耕作土に近いもので、昭和期の耕地整理以前の耕作にともなう溝の可能性が大きい。

SD01 調査区中央で段丘端部にまで延びる溝である。幅0.6m、深さ0.1mである。埋土は褐色粗粒砂である。遺物はわずかである。

SD02 SD01と同時期と考えられる溝である。幅0.5m、深さ0.1m。埋土は褐色細粒砂である。遺物はわずかである。

SD03 調査区南部の段丘が河谷に移行する斜面上で、これに直行する方向の溝である。長さ11.5m、幅0.6m、深さ0.1mである。埋土は褐色粗粒砂である。出土遺物は山茶碗などが少量出土しているが遺構にともなうものではない。

SD04 SD03に隣接しこれに平行する。長さ4.8m幅0.5m深さ0.1mである。埋土は黄灰色シルトである。遺物は出土していない。

SD05 門前川河谷の溝状の落ち込みである。長さ3.1m幅0.6m深さ0.1mである。埋土は黒褐色粗粒砂である。遺物は出土していない。

2. 自然地形他

倒木痕跡

SX01 (第10図上) 調査区中央東部で倒木の痕跡を検出した。長軸3.7m短軸2.6m、深さ0.6mである。検出面での平面形は楕円形で、長軸方向の中心に基盤土がはいり、楕円の両側縁に包含層土が三日月状にはいる。断面は上半中央に基盤土の黄褐色細粒砂がはいり、中央の両側から底にかけては包含層土の褐色細粒砂である。包含層土から縄文時代中期後半から晩期前葉にかけての少量の縄文土器が比較的集中して出土した。縄文時代晩期の倒木痕跡と考えられる。

包含層 (第10図下)

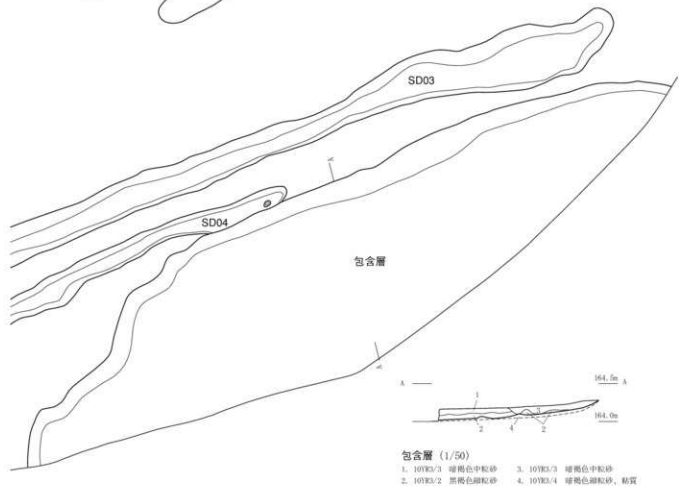
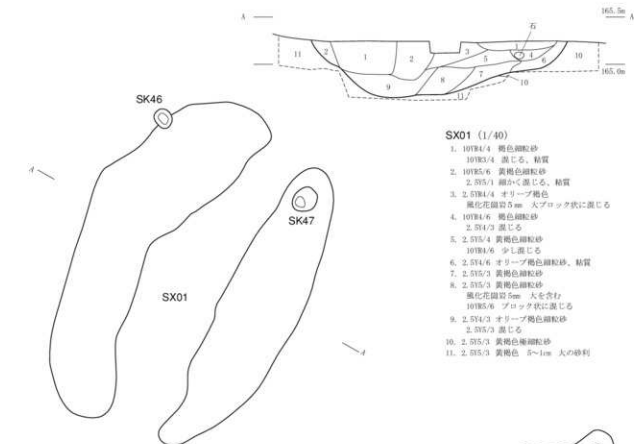
門前川に隣接する調査区南部の段丘面の傾斜地直下で中世の遺物包含層を検出した。門前川の河谷に薄く広がる。埋土は暗褐色砂質土である。少量の山茶碗細片が出土した。東壁際で深さ15cmである。

自然河道

下位段丘面上の基盤面で、小規模の浅い自然流路と考えられる溝状の自然地形を2ヶ所で見出した。いずれも下位段丘の端部に近く、河谷に向かう方向をとって高度を下げる。全長は十数mである。部分的な検出で、段丘の高所に向かってさらに延びるものと考えられる。遺物が全く検出されなかったため、時期は確定できない。縄文時代以前と考えられる。

NR01 調査区中央部の下位段丘面上で検出された。段丘端までほぼ南北に走る。検出面で長さ約17mで、深さは数cm以下である。埋土は細礫混じりの褐色粗粒砂である。

NR02 調査区南部の下位段丘面上で検出された。段丘端に向かって北東から南西に走る。検出面で長さ約14m、深さ約0.1mである。埋土は細礫を多く含む褐色粗粒砂である。



第10図 倒木痕跡・中世の包含層

第3章 遺物

第1節 縄文時代の遺物

1. 土器

前期(第11図1)

1はSK03の埋土中より検出された。外面にアナダラ属の貝殻縁辺の施文具による斜方向に連続する刺突文が施される。口唇部には連続する細かい刻みが認められる。器壁は3mmと薄く、灰白色である。縄文時代前期前葉の清水ノ上Ⅱ式に併行する時期と考えられる。

中期～晩期(第11図2～19)

SK94 18は土坑に直立して埋置された無文の深鉢の胴部である。器面は摩耗している。胴部から頸部にかけてわずかな括れを有する。17は直立した18の内部に水平方向に埋置された深鉢底部である。底部から下胴部にかけて緩やかに曲線的に立ち上がる器形である。外面は斜方向に磨きが施される。器形及び、出土土器の様相より17・18は後期に属するものと考えられる。

SK132 19は、深鉢の底部から胴中央にかけての部分である。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる器形である。下胴部は縦方向、胴部中央は斜方向の磨きが部分的に認められる。縄文時代後期と考える。

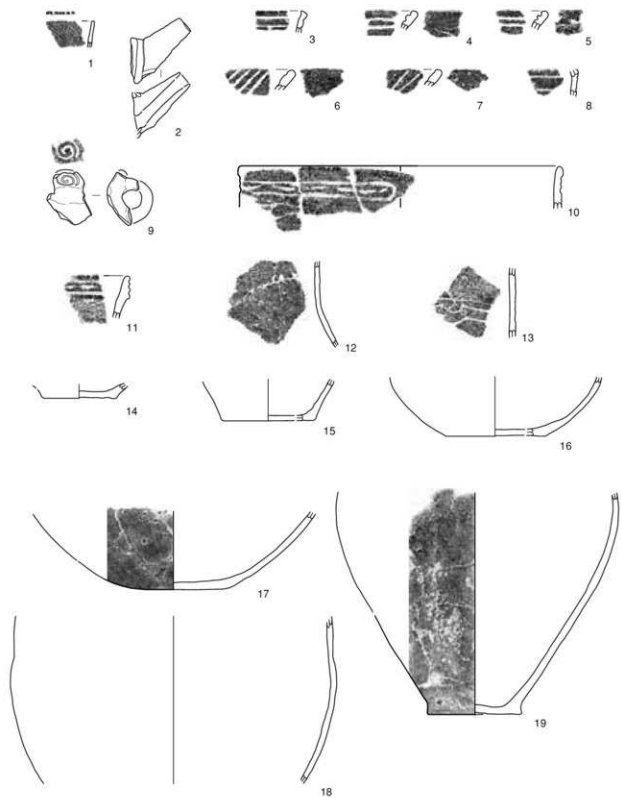
SX01 9～16は、後期の倒木痕跡の埋土中から出土した。9は中期後半の深鉢の口縁の突起部である。外面に把手がある。内面側の頂部に渦文が施文される。10・11は口縁部に半截竹管による平行沈線を施文するもので、元刈谷式に並行し、晩期前葉に属する。12は頸部がややくびれる深鉢の頸部である。無文で詳細は不明であるが、器形から後～晩期と考える。13は口縁に対して平行する沈線と磨消し縄文から構成される文様で、後期前葉に属する。14～16は深鉢の底部である。14は底部から体部が直線的にやや大きく開く形で立ち上がる。15は直線的に立ち上がる器形である。16は緩やかに曲線的に立ち上がり、底径はやや大きい。

包含層 2～8は中世包含層及び耕作土から出土した遺物である。2は注口土器の注口部である。注口の基部に突帯を巡らし、それらの境界に沈線を1条を巡らす。基部の下部には半円形の突帯を有する。後期に属する。3～8は調査区南部下位段丘面の端部の包含層から出土した。3は口縁端部近くが外側にわずかに屈曲し、その直下の外面に棒状の施文具によって口縁に平行する2条の沈線が巡らされる。沈線間には縄文が施される。中津式併行で後期前葉の時期と考えられる。4～7はいずれも内面に文様を有する深鉢の口縁部で、後期前葉と考えられる。4と5は同一個体の可能性がある。口縁部は外反し、内面の直下に棒状の施文具による口縁に平行する2条の沈線が巡らされる。6と7は同一個体の可能性がある。やや肥厚して外反する口縁部内面直下に口縁に対して斜方向の沈線が認められる。堀之内Ⅱ式併行で林ノ峰貝塚に類例がある。後期前葉の時期に属する。8は外面に浅い2条の沈線が認められる。後期と考える。

2. 石製品

石器および石製品は10点出土した。その他、黒曜石、チャート、水晶などの剥片が検出された。縄文時代の時期に属すると考えられるが、確実な時期が認定できる遺構から出土したものは少ない。

石鏃 (第12図1～5) 1は土器埋設遺構SK132の埋土中より検出された。2は縄文時代後期



第11図 縄文土器(1/4)

倒木痕(SX01)の埋土中より出土した。3～5は中世以降の包含層中より出土した。1～3・5は無茎凹基式、4は無茎平基式である。いずれも縄文時代後期の時期に属する可能性が高い。石材は3が溶結凝灰岩で他はチャートである。

石錐(第12図6) 錐部先端と一方の基部を欠損する。現耕作土中から出土した。石材はチャートである。

石核(第12図7) 使用痕跡がある石核である。長軸と短軸の一方に連続した小剥離が認められる。楔形石器の可能性もある。石材はチャートである。

磨製石斧(第12図8) 定角式磨製石斧の刃部である。基部および表面を大部分欠損する。刃部には斜方向の擦痕が認められる。石材はホルンフェルスである。

磨石(第12図9・10) 表面が摩耗している円礫である。いずれも直径4cm程度で、表面に人為的な摩耗が認められる。9は中世の遺構中、10は中世以降の包含層中より出土した。石材は9は珪質岩、10はチャートである。



第12図 石器・石製品(1/2)

第2節 中世以降の遺物

中世の遺物は調査区全体で検出される。遺構に伴うものは少量である。わずかであるが、近世の遺物も検出された。(註)

SK07(第13図20・21) 20は瀬戸窯産連房登窯製品で18世紀前半の志野丸皿である。遺存状況は良くない。21は輸入磁器で玉縁口縁の碗の口縁部である。小片で径は不明である。11～12世紀と考えられる。

SK11(第13図22) 22は古瀬戸施釉陶器で卸目付大皿の底部。古瀬戸後Ⅱ～Ⅳ期で14世紀末から15世紀後葉の時期である。

SK18(第13図23) 23は北部系山茶碗第5型式の碗口縁部である。

SK33(第13図24) 24は北部系山茶碗第5型式の皿口縁部である。

SK41(第13図25) 25は北部系山茶碗第9型式の碗口縁部である。

SK43(第13図26・27) 南部系山茶碗第4型式の碗が2点出土する。27は小形の碗である。

SK65(第13図28・29) 28は、施釉された陶製の数珠である。被熱により融着している。生産窯と時期は不明である。29は南部系第4型式の山茶碗底部である。

SK75(第13図30) 30は南部系山茶碗で第6型式の底部である。

SK97(第13図31) 31は瀬戸窯産連房登窯の長石釉丸碗である。高台部のみで、18世紀代と考えられる。

SK120(第13図32・33) 32と33は南部系山茶碗第4型式の碗である。小碗で完形に近い。高台底面に粉痕を有する。

SK130(第13図34) 34は北部系山茶碗第4型式の底部である。

包含層出土の遺物を一括する。35・36・38・40は調査区北部の上位段丘の斜面直下の包含層中からの出土遺物である。35は瀬戸窯産の施釉陶器の天目茶碗で大窯第1段階である。36は瀬戸窯産連房登窯製品の鉄釉の片口口縁部である。38は瀬戸窯産施釉陶器の口広有耳壺の口縁部である。鉄釉で大窯第1段階の時期である。40は瀬戸窯産連房登窯製品で練り鉢の底部である。鉄釉で18世紀代と考える。37・39は河谷部分の包含層から検出された。37は南部系山茶碗第8型式。39は瀬戸窯産連房登窯片口口縁部である。18世紀で灰釉が施釉される。

その他の遺物として、陶丸と輸入磁器がある。(第13図41～46)

陶丸 41～44は包含層中から出土した。直径はいずれも2cm程度。44は全面に刺突痕がある。

輸入磁器 45は景德鎮窯産の青磁碗底部である。12～13世紀代と考えられる。46は染付皿で、太宰府出土遺物の分類で皿B2群と考えられる。16世紀後半の時期である。

(註)

中世から近世にかけての瀬戸窯産陶器類についての編年の位置づけは、以下の藤澤良祐氏の編年案に基づく。

「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要3』三重県埋蔵文化財センター

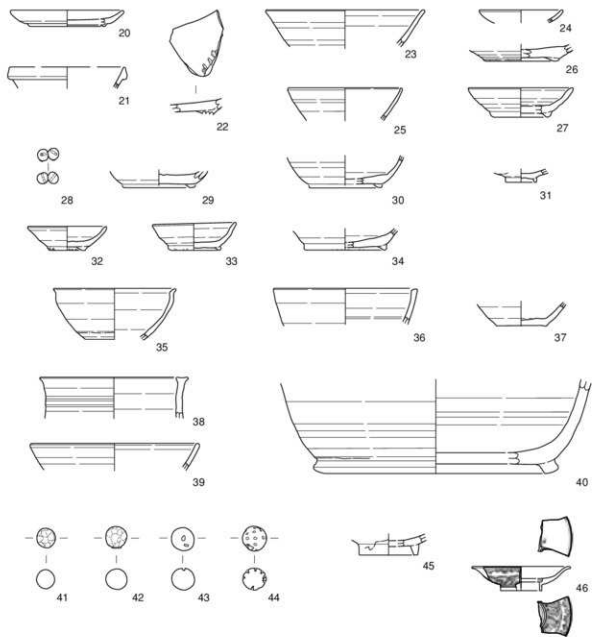
「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』V 瀬戸歴史民族資料館1986

「本業焼の研究(1)」『研究紀要』VI 瀬戸歴史民族資料館1987

「本業焼の研究(2)」『研究紀要』VII 瀬戸歴史民族資料館1988

「本業焼の研究(3)」『研究紀要』VIII 瀬戸歴史民族資料館1989

「瀬戸古窯址群-古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要』X 瀬戸歴史民族資料館1991



第13図 中世以降の遺物(1/4)

第4章 自然科学的分析

第1節 惣作鐘場跡SK94埋壘内埋土のリン・カルシウム分析

1. はじめに

ここでは埋葬施設ではないかと考えられるSK94埋壘内埋土の蛍光X線分析を行い、骨の主成分であるリン(P)とカルシウム(Ca)に注目して埋葬施設の可能性について検討した。

2. 試料と方法

試料はSK94埋壘内埋土(以下SK94)と、SK94の比較試料で埋葬施設ではない土壌Na.10の2点である。SK94はやや水分を含んだ有機質土でNa.10は砂質土である。各試料の一部(掘り率程度)は0.25mmの目の篩で水洗選別を行って内容物の観察を行った。

蛍光X線分析では、ビニール袋に入っている試料をよく振って内部の土壌を均質化し約1.5gずつ採取した。これらを恒温乾燥機で乾燥させた後、人骨とは無関係の炭化材や小さな植物の根や小石などは極力取り除いてセラミック乳鉢で粉末化した。これら粉末を直径3cmの塩化ビニール製のリングに無水四ホウ酸リチウム(Li₂B₄O₇)を詰め10tの圧力をかけたものの上に約0.3g薄く展開して、更に20tの圧力をかけてブリケットを作成した。

測定は、(株)フィリップス社製(現在(株)バナリテカルに社名変更)波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)を用いて、定性スペクトルから得られた主成分元素10元素(Na₂O、MgO、Al₂O₃、SiO₂、P₂O₅、K₂O、CaO、TiO₂、MnO、Fe₂O₃)のピークからFP法による半定量分析を行い、元素全てのTOTALが100%になるよう規格化した。

3. 分析結果

各試料の水洗選別で検出されたものを表1及び写真1に示す。SK94からは、約2~5mmの破片状の炭化材が若干検出された。しかし残存状態が悪いため樹種は不明である。土器片も検出された。また1cm前後で不定形の茶色の物質が比較的多く検出された。この茶色の物質を割ると内部は黒色でこの黒色部の蛍光X線分析を行ったところ、鉄が約40%、マンガンが約40%と高率に含まれるものと確認された。Na.10からは砂粒以外特に目立ったものは確認されなかった。

表2には試料の蛍光X線分析結果に示す。P₂O₅とCaOに注目すると、SK94のP₂O₅は0.072%、CaOは0.95%でNa.10のP₂O₅は0.04%、CaOは0.91%で、SK94の方がリンとカルシウムの分析値が僅かに高かった。

4. 考察

日本は酸性土壌であるため人骨は分解されやすく保存状態が悪いが、土壌中に人骨の成分が残存する場合はP₂O₅とCaOの分析値に表れていると考えられる。ちなみに人骨片を分析するとP₂O₅が約40%、CaOが約55%である。

表2の分析結果より、SK94はNa.10よりP₂O₅とCaOの分析値は僅かに高かったものの、分析値そのものは1%未満で高いものではなかった。また、水洗選別で樹種不明の炭化材が若干確認されたが、樹種によってはカルシウムの含有量の多いものもあるので、微細な炭化材が土壌中に混在したため試料の化学組成に影響を与えた可能性はある。SK94で炭化材の他に検出

された土器片はおそらく埋甕の破片と思われる。また約1cm前後の鉄とマンガンの塊については、一般的な鉄滓のような強熱による変色や発泡等は確認されなかった。これらのことから、今回の分析ではSK94が埋葬施設と判断できるような結果は得られなかった。

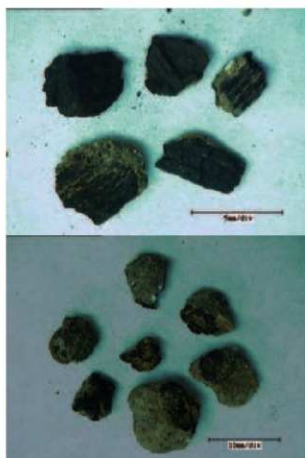
(小村美代子 バレオ・ラボ)

遺物	骨片	炭化材	土器片	鉄とマンガンの塊
SK94埋甕埋土	—	有	有	有
No.10 土壌	—	—	—	—

第2表 洗浄によって検出された資料

遺物	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
SK94埋甕埋土	1.77	0.59	21.65	67.86	0.072	3.14	0.95	0.39	0.053	3.54
No.10土壌	2.23	0.38	14.31	76.36	0.048	3.83	0.91	0.18	0.084	1.67

第3表 各資料の化学組成(単位:%)



第14図 洗浄によって検出された資料の写真(上:炭化材 下:鉄・マンガン)

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

惣作鐘場遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、SK94・V F19c・埋裏内埋土より採取した炭化物1点、SK22・VIE4sより採取した炭化材1点の併せて2点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に校正した年代を示す。

¹⁴C年代値(yrBP)の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代校正の詳細は、以下の通りである。

暦年代校正

暦年代校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を校正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、校正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に校正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に校正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代校正値は¹⁴C年代値に対応する校正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行なった。暦年代校正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

(山形 秀樹 バレオ・ラボ)

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代, p. 3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p. 215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代校正値	1σ 暦年代範囲
PLD-1992 (AMS)	炭化物 II SSK02D SK94 VF19c 埋蔵内埋土	-25.2	3690 ± 30	cal BC 2120 ⁰ cal BC 2100 ⁰ cal BC 2040	cal BC 2135 - 2080 (66.2%) cal BC 2060 - 2030 (32.8%)
PLD-1993 (AMS)	炭化材 II SSK02D SK22 VIE4a	-26.6	1035 ± 25	cal AD 1000 ⁰ cal AD 1010 ⁰ cal AD 1015	cal AD 995 - 1020 (100%)

第4表 放射性炭素年代測定及び暦年代校正の結果

第5章 まとめ

惣作・鐘場遺跡は道路建設にともない、近年になって調査対象になった遺跡であり、その性格等は地域の中で位置づけがなされる段階とはなっていない。現在のところ、遺跡の調査範囲の大部分を占める県道瀬戸設楽線関係の調査資料については未整理のため、遺跡の明確な全体像は明らかになっていない。今後の資料整理と関連して、いくつかの検討課題を提示する。

1. 縄文時代

本センターがこれまで行った調査は30000㎡余に及ぶ。遺跡の中でこの時代の遺構、遺物が比較的多く検出される部分は2区域である。一つは、遺跡の北東端の赤津川に面する低位段丘の斜面である。平成13年度の01D区では縄文中期を中心とする時期の遺物包含層が確認されている。遺構に関しては調査区内からは検出されておらず、隣接する丘陵上からの流れ込みと考えられている。

他の区域は本調査区を含む部分である。00A区及び01A区において縄文時代中期の竪穴住居が検出されている。00A区では、上位段丘面において円形竪穴住居が3棟検出された。01A区では、下位段丘面においた5棟の円形竪穴住居が検出されている。いずれも削平が著しいため遺存状況は悪く、遺物の出土量も少ない。遺跡の南部に中期の集落が存在したことは明らかであるが、現在のところ調査区の制約および遺存状況から詳細は明確に示していない。

今回の調査で中心となる時期は、後期から晩期前葉の時期である。この点、隣接する調査区の状況とはやや異なる様相を示す。2基の土器埋設遺構については、竪穴住居に伴う可能性が大きく、調査区の位置する下位段丘面上にこの時期の集落が存在したことが予測される。これらの時期以外に早期末から前期初頭の土器が出土していることから、縄文時代全般に断続的に集落が展開していたと推定される。周辺の縄文時代の遺跡の動向も含め、考察する必要があるものと考えられる。

2. 中世

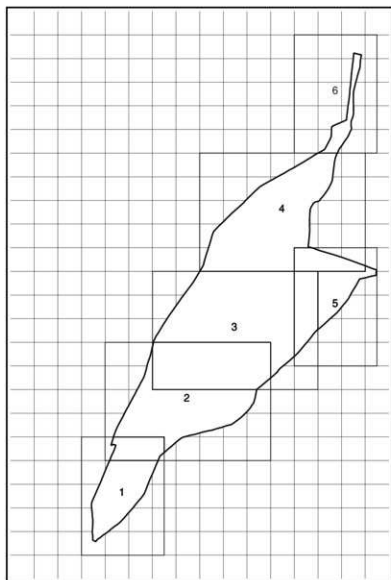
遺跡全体においては、中世から戦国時代の遺構・遺物は上位段丘面中央03B区以北の惣作川河谷までの部分に集中する。この区域に13世紀以降の中世の土坑および柱穴と考えられる小土坑が集中し、井戸が数基確認されている。戦国時代には溝によって囲まれた集落が展開することが、これまでの調査で明らかになっている。最終的には近世前期まで集落が連続することが確認され、この時期の拠点集落が形成されていたことが推測される。

02D区では中世初期の掘立柱建物2棟検出された。軸線が同方向になることから同時に存在し、集落を構成する建物と考えられる。同時期の柱穴と推定される小土坑および土坑は調査区全体で検出され、基盤面上には同時期の包含層が認められる。このことから平安時代末より集落が展開し、耕作地としての利用が開始されたと考えられる。この時期以降の中世の遺構は確認されないうえ、短期間の集落であった可能性がある。また、00A区では本調査区との境界である急傾斜地において15世紀前半の包含層が確認されている。同時期の遺物が調査区の北半で検出されたが、遺構からは確認されなかった。この時期の集落および包含層と、上位段丘上の03B区以北の中世から近世にかけて拠点となる集落との関連については今後の検討課題である。

図 版

遺構図版(1/100) 1 ~ 6

写真図版 1 ~ 9

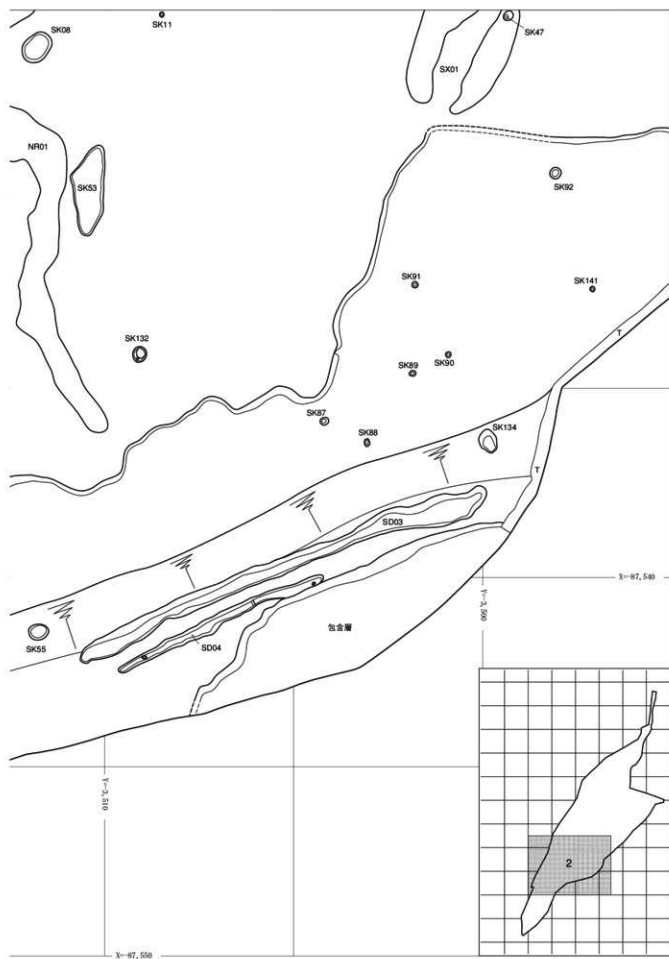


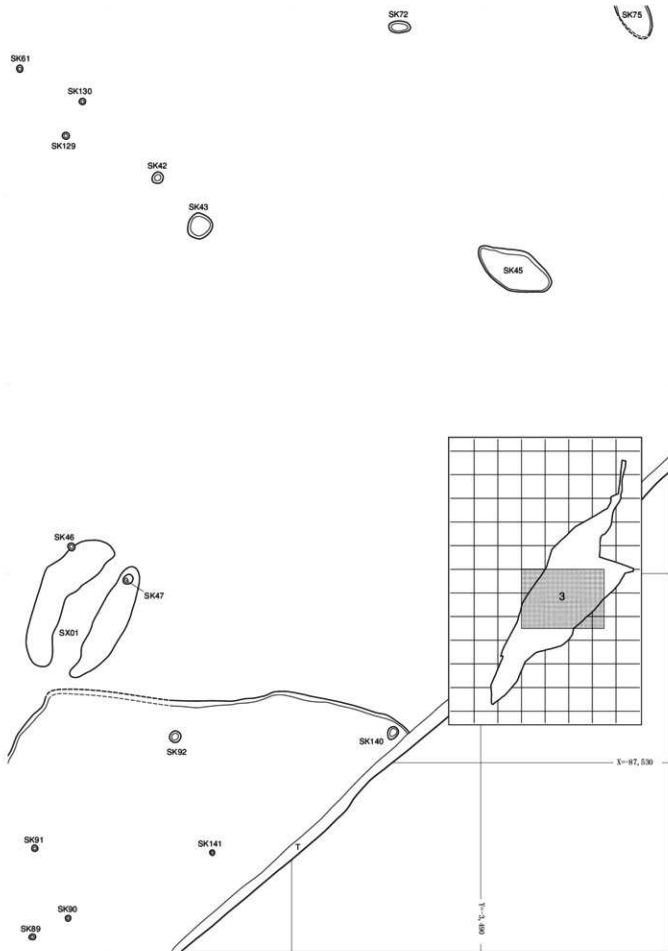
遺構図版割付図

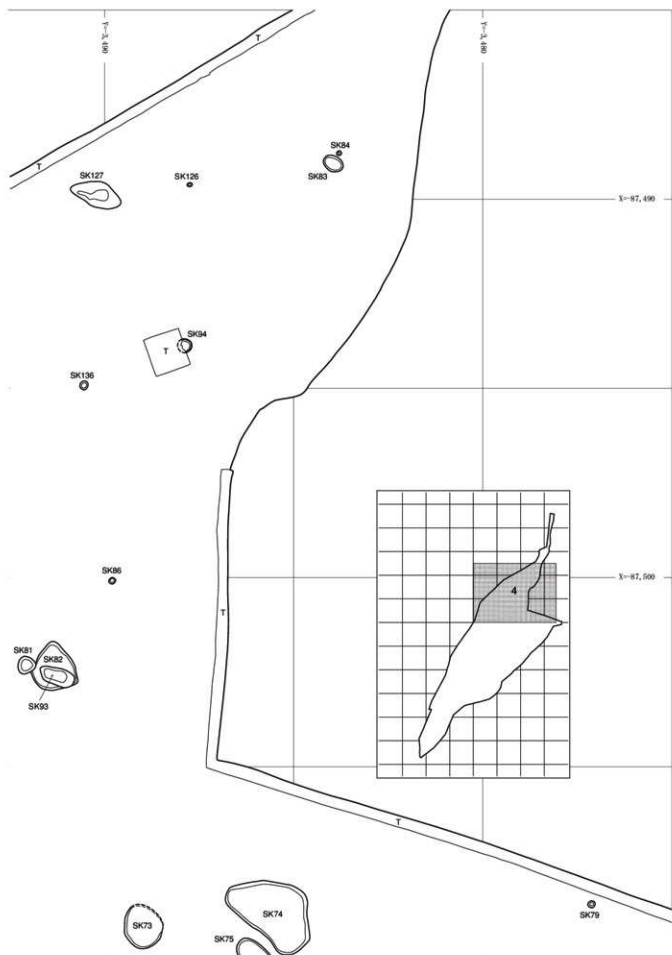


遺構図 2-1

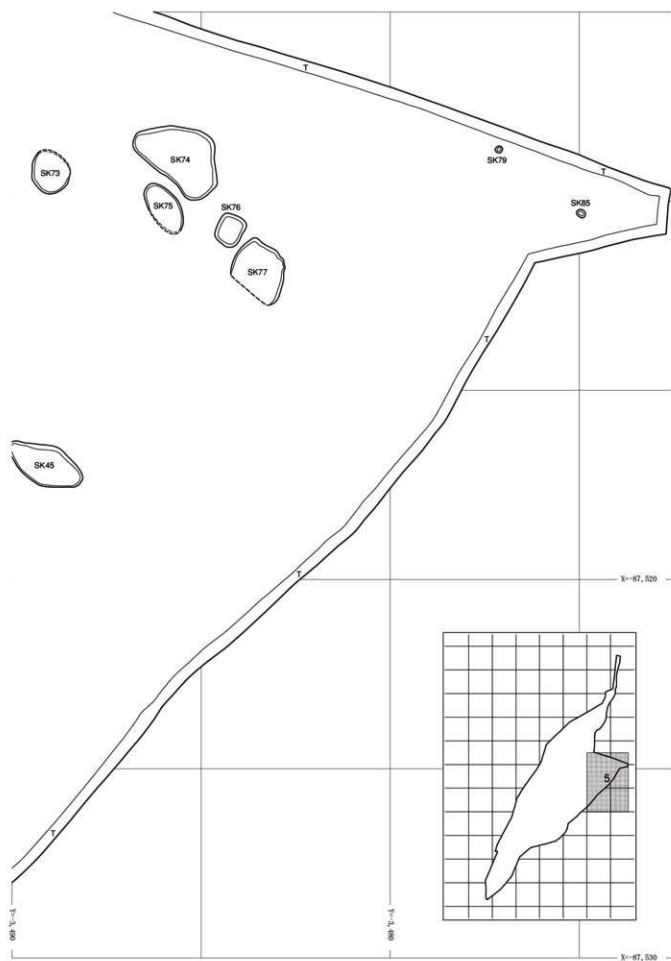


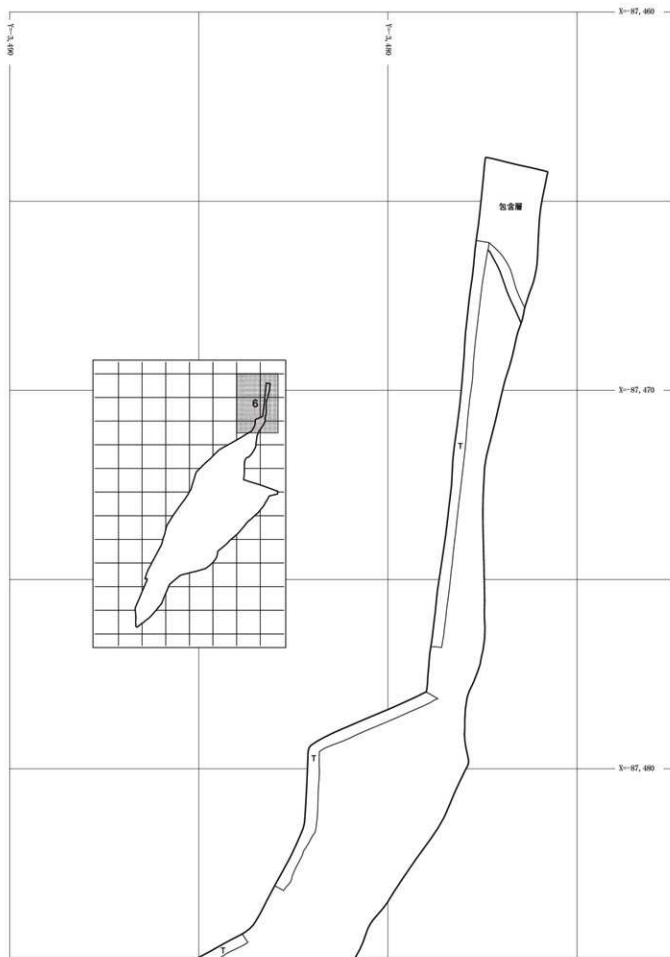






遺構図 5







調査区遠景(北より)



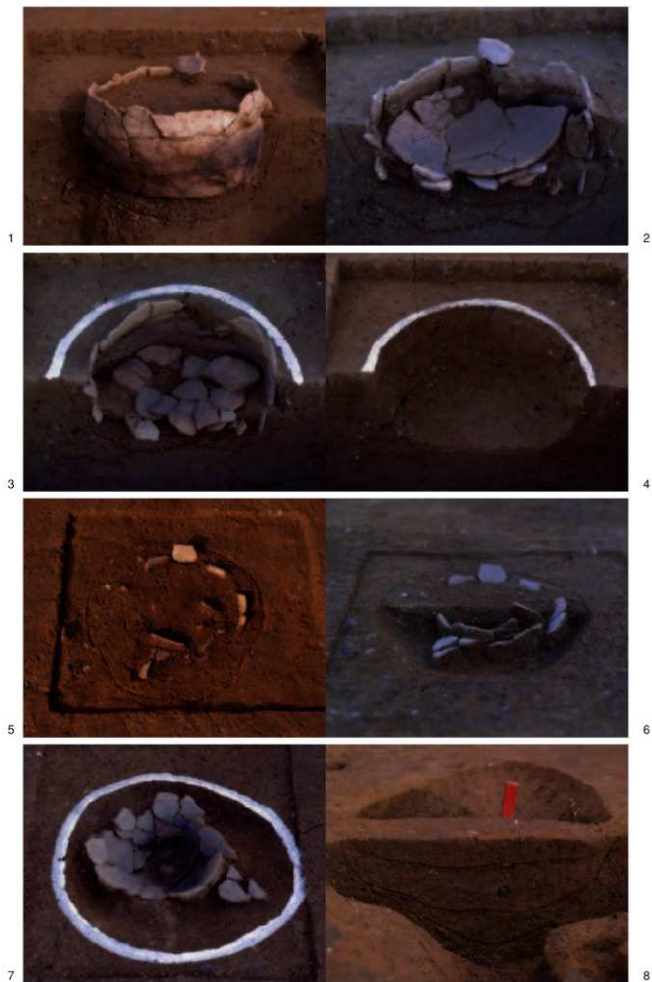
調査区全景(南より)



調査区全景(北より)



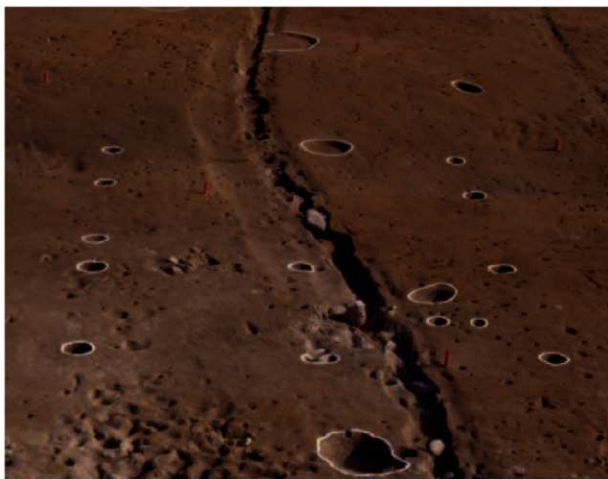
調査区南半(南西より)



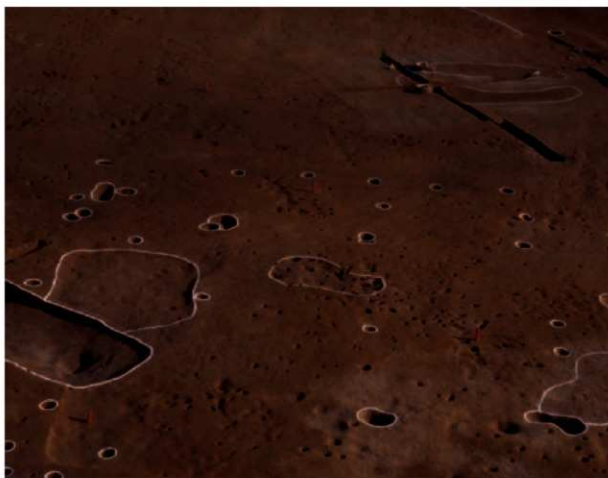
1 ~ 4 SK94

5 ~ 7 SK132

8 SK127



SB01(西より)



SB02(西より)



1 SK120 5 SK76
2 SK07 6 SK65-96
3·4 SK43 7·8 SK65



SX01 遺物出土状況



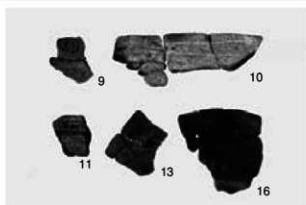
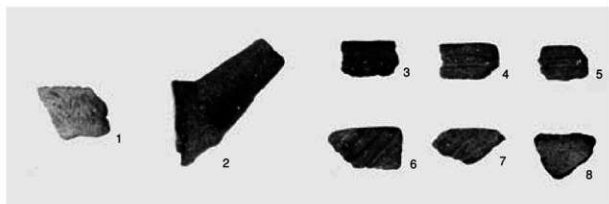
SX01 南側セクション



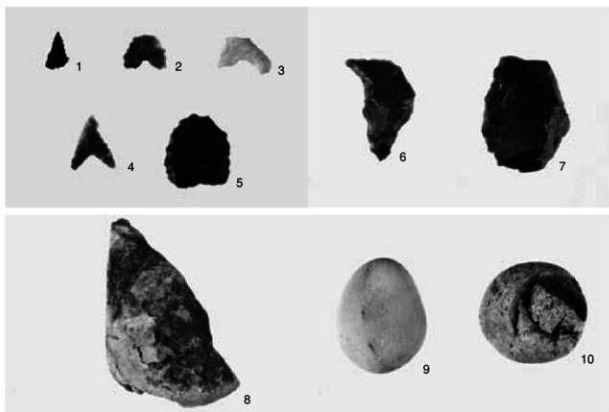
NR01(南より)



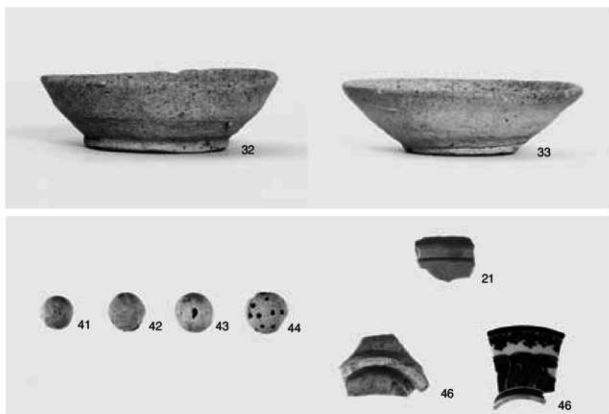
NR02(南より)



縄文時代土器



縄文時代石器・石製品



中世陶器・磁器

報告書抄録

ふりがな	たこやまCかまあと・そうさくかねばいせきいち							
書名	嵐山C窯跡・惣作・鐘場遺跡I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第134集							
編著者名	永井宏幸・酒井俊彦・川添和暁・植田弥生・山形秀樹							
編集機関	財団法人 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	2005.8.31							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
嵐山C 窯跡	瀬戸市嵐山町	23204	なし	35° 13' 20"	135° 08' 11"	20020408 ～ 20020704	700	東海環状 自動車道 建設
惣作・鐘場 遺跡	瀬戸市惣作町・鐘場町	23204	3792	35° 12' 47"	137° 07' 47"	20021020 ～ 20021210	2,125	東海環状 自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
嵐山C 窯跡	集落	縄文時代	土坑	縄文土器・石器		窯築造以前の遺構を 確認した。 <small>窯体と灰層がほぼ完備できた。</small>		
	集落	古代	土坑	須恵器				
	生産遺跡	中世	窯体・土坑・灰原	灰釉系陶器碗・皿				
惣作・鐘場 遺跡	集落	縄文時代 中世	土器埋設遺構 掘立柱建物	縄文土器 山茶碗		竪穴住居の施設の可 能性がある。 同時存在の掘立柱建 物2棟を検出する。		
文書番号	嵐山C窯跡 発掘届(13理セ第175号 2002.3.1) 通知(13教生第36-28号 2002.3.14) 終了届・保管証・発見届(14理セ第46・47号 2002.6.25) 鑑査結果通知(13教生第36-29号 2002.8.6) 惣作・鐘場遺跡 発掘届(13理セ第174-1号 2002.2.25) 通知(13教生第36-28号 2002.3.14) 終了届・保管証・発見届(14理セ第121・123・124号 2002.12.10) 鑑査結果通知(14教生第72-8号 2002.12.17)							
要約	嵐山C窯跡 13世紀第3四半世紀に比定される中世窯を2基、および付属施設を調査した。本窯は灰釉系陶器碗・皿の専焼である。中世窯の分布を詳細に見ると、赤津地区の最古段階で、その後この地区に展開する中世窯の先駆的操業として注目できる。 惣作・鐘場遺跡 縄文時代後期と考えられる土器埋設遺構を2基検出する。竪穴住居に付随するものと考えられ、集落が展開していたと推定される。また、中世の掘立柱建物2棟を確認する。調査区全体に柱穴と推定される小土坑が検出され、数棟から構成される集落が形成されていたことを確認する。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第134集

夙山C窯跡・惣作鐘場遺跡I

2005年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社